

文化衝撃から文化衝突へ

立花 希一

Culture Shock or Culture Clash?

Kiichi TACHIBANA

I. 異文化との出会い

1980年8月から1983年7月までの3年間、イスラエル政府給費留学生としてテルアヴィヴ大学に留学した。故国を離れ、別の伝統、文化をもった社会で生活するようになると、当然のことながら日本やイスラエルの文化についてしばしば思いをめぐらすようになった。本稿では、イスラエルで遭遇した出来事や意外に思った事柄について具体的に述べながら、イスラエルと日本の文化の相違点や類似点について考察し、さらに、望ましいと思われる異文化交流の在り方を探ってみたいと思う。しかしながら、予めお断わりをしておかなければならないことが2つある。1つは、社会学者や人類学者は様々な民族の文化や伝統についてシステムティックな調査や研究を行うが、私はそのような調査をするために留学したのではないので、体系化された成果を得ているわけではないということである。しかし、哲学や倫理学では異文化理解や評価の問題について、それが「相対主義」の問題として今日盛んに論議されており、私自身もその問題に関心を持っているので、そのような視点からの議論になるであろう。2つ目は、私の体験したことが、もしかすると欧米諸国や他の諸地域でも見られることであって、イスラエル文化に特有のことではないかもしれないということである¹⁾。

II. イスラエル文化の一般的特徴

具体的な話をする前にイスラエルあるいはイスラエル人についての一般的特徴を挙げておきたい。

(1) イスラエル文化の多様性

「文化」を大雑把に定義すると、ある特定の集団によって後天的、歴史的に形成され、共有される生活様式の総体であるということになると思われるが、先ず指摘しておかなければならないことは、イスラエルが複合的で多様な文化をもつ社会だということである。普通イスラエルといえば、ユダヤ民族国家であるとみなされがちだが、必ずしもそうではない。アラブ人も住んでいるし、また少数であるが、様々な宗派のキリスト教徒も住んでおり、それぞれが独特の文化、生活様式をもって暮らしている。因みにイスラエルの公用語はヘブライ語とアラビア語であり、道路標識などにはさらに英語が書かれている。

(2) ユダヤ人の多様性

ユダヤ人に話を限定しても、その文化は多様である。日本人は「日本人とは何か」と盛んに

間い、日本人論の本がベスト・セラーになったりするが、もしかするとユダヤ人の方がもっと盛んに議論するかもしれない。「ユダヤ人とは何か」という問題が最高裁で争われたりする位だからである。イスラエルは文字通り全世界に離散していたユダヤ人が集まって出来た国である。出身国の相違によって自らが身につけてきた文化があまりにも異なっており、「ユダヤ人」としての共通点を見つけることが非常に困難（不可能？）である。例えば、東欧のユダヤ人とイエメンのユダヤ人では、服装も違っている²⁾。また人種も多種多様である。東洋系のユダヤ人もいれば、白人も黒人もいる。私に向かって「おまえはユダヤ人か」と聞かれることがしばしばあった。日本人の場合、青い目の金髪の人間に対して「おまえは日本人か」と聞くことがあるだろうか。

共通点として「ユダヤ教」³⁾が挙げられるかもしれないが、これがまた曲者である。伝統的なハラハー（ユダヤ教の宗教法規）によるユダヤ人の定義によれば、「ユダヤ教に回宗した者と、母親がユダヤ教徒（人）の子供がユダヤ教徒（人）」である。純粋な信仰上の動機からユダヤ教徒に回宗した者は当然、敬虔なユダヤ教徒といつてよいであろうが、母親がたまたまユダヤ人であったために、ユダヤ教徒とみなされる人々はどうかであろうか。ユダヤ教に対して否定的であったり、無関心であったりするユダヤ人がイスラエルには少なからずいる。というよりむしろ、伝統的な教えや戒律を厳格に守って生活しているユダヤ人は全体の20パーセントに満たない。イスラエルでは、ユダヤ人を「宗教的ユダヤ人」と「世俗的・非宗教的ユダヤ人」に分類することがしばしば行われるが⁴⁾、後者の方が圧倒的多数である。彼らは「ユダヤ教徒」なのだろうか⁵⁾。また、イスラエルで生まれ育った二代目、三代目の中には「私はユダヤ人ではなくて、イスラエル人だ」と主張する人もいる。したがって、ユダヤ教はイスラエルの文化のごく一部に過ぎないといえるかもしれない。要するに、イスラエルの文化は多様の一言につきる。そのようなわけで、これから私が述べることは、ごく限られたほんの一面にすぎず、過度の一般化と過度の単純化でしかないのである。

III. エピソード

(1) 床屋で

出発前に床屋に行く暇のなかった⁶⁾私は、イスラエルに着いて間もなく、床屋に行き、そこで最初の「カルチャー・ショック」を受けた。床屋には椅子とその前に大きな鏡がある。少し古めかしい感じではあるが、中のつくりは日本と変わりがない。問題は床屋さんの散髪の仕方である。といっても髪形のことではない。日本では、私の知る限り、客は椅子に座ったら、ただじっとしていればよい。眠くなれば、居眠りをしてもかまわない。床屋さんの方があちこち動き回って、散髪する。ハサミの角度の関係で、首を曲げられたり、回されたりすることもあることはあるが、それは「必要最小限」におさえられているはずである。ところが、イスラエルでは、椅子に座って散髪が始まると、椅子は回される、体は傾けさせられる、首は乱暴に曲げられたり、回されたりしながら、散髪されるのである。居眠りするところではない。床屋さんの方も少しは動くが、どうも客を動かすことによってハサミの角度を調節し、自分の方は動かないですます工夫をしているようである。この違いにびっくりした。床屋さんは立ち仕事で、一日何人もの客の散髪をするので、とても疲れる。客はその時だけちょっと大変な思いをすればよい。目的はきちんと散髪することだから、それさえうまく成し遂げればよい。最小限の労力で同じ仕事を行うやり方のほうが効率的で、合理的である。床屋さんの内心はこのようなのだろうか。「お客様は神様です」という言葉は、日本だけで通用するものであった。

後日、このことをイスラエルの友人に話したところ、「その時、文句を言えば、良かったじゃないか。言うことを聞いてくれないかもしれないが、もしかしたら、やり方を改めてくれるかもしれない。だけど、何も言わなかったら、彼にはわかりっこないよ。彼は当り前のことをしているだけなのだから」と言われてしまった。二度びっくり。文句を言うなんてことに思いもよらなかったし、「当り前のこと」の内容が同じ人間なのに、違っているということに気付きもしなかったからである。私を含め、ここの登場人物についていろいろいべきことがあろうかと思うが、少なくとも、それぞれの考えや感じ方が相違していることは確かであろう。人間はその違いを認め合ったうえで、お互いの理解を深めようと努力するが、そのために「口がある」ということを思い知らされたのである。しかし、その後も何度も床屋に行ったが、私はとうとう一度も文句を言うことはできなかった。

さて、現在の時点において、この体験をどう考えたらよいのだろうか。イスラエル人のお客は、イスラエル人の床屋と日本人の床屋のどちらのやり方を気に入るであろうか。おそらく、後者であろう。仮に日本式床屋がイスラエルに進出したとしたら、きっと人気がでるであろう。イスラエルの床屋もそのやり方を採用するようになるかもしれない。先に、イスラエルの床屋のやり方は「効率的」で「合理的」であると述べたが、床屋の労力を軽減することが目的であるとしたら、そうなのであって、無条件に成立するわけではない。お客の人気を得て、商売を繁盛させることが目的ならば、日本式の方が「合理的」である。すなわち、「合理性」の一つの側面においては、合理性は目的依存的であるということがわかる⁷⁾。

では、客の方はどうであろうか。私はとうとう言い出せなかったが、快適さを追求するとか、床屋のやり方を客のためになるように改善するとかということが目的であるならば、やはり言うべきであった。何も言わなければ、何も変わらず、現状維持(status quo)でしかないからである。日本の床屋を知っているイスラエル人がいたら、イスラエル人の床屋におそらく文句をいうであろう。やはり、言葉を用い、議論するということは合理的なことなのである。

(2) アガシのアドバイス

私の指導教官であるアガシと初めて会った時、今後の研究などについて話をしたが、それ以外でとても印象に残ったことが1つある。それは、異邦人である私がイスラエル社会でどのように振る舞ったらいいだろうかという問いに対する彼のアドバイスのことである。彼は次のように答えた。「先ず自分のやりたいようにやりなさい。他の人々が何も言わず、問題が生じなければ、そのまま続けなさい。しかし、もし誰かが何か言ったら、その人やその他の人たちと話し合っ、問題がどこにあるのかを見極め、その解決策を探しなさい」と。その時はなるほど、合理的なやり方だと納得したのだが、「言うは易く、行は難し」で、この方針通り実行することは私にとって至難の技であった。他人を気にせず、自分のしたいように先ず実行するということが、特に当初は、できなかったのである。また、仮にそれができたとしたら、イスラエル人がいろいろと批判してくることは目に見えている。それに対抗して議論する力をもつこともそう容易なことではない。こういうわけで、私はどう行動してよいかわからなくなってしまったのである。

さて、日本に来た留学生に対して、日本人だったら、アガシと同様のアドバイスをするであろうか。私は実際に留学生に対してアドバイスをした経験はないが、私だったら次のようにいうだろう。「初めはできるだけおとなしくしていて、様々な面で、他の人たちがどのように振る

舞うかをよく観察し、それを真似しなさい⁸⁾。そして、次第に慣れてきたら、少しずつ自分のカラーを出すようにしなさい」と。この方針に従って、留学生が日本で行動したら、日本人はおそらくその留学生を快く受け容れるのではなからうか。他方、その留学生がアガシのアドバイスに従って日本で行動したら、初めのうちは、まだ日本に来たばかりだからと大目に見られるかもしれないが、そのやり方がずっと続けば、受け容れられるどころか、嫌われてしまうにちがいない。直接、周りの人がその留学生に注意をしたり、その行動を批判したりすることも考えにくい。ただ眉をひそめるだけであろう。ところが逆に、イスラエルで私のアドバイスに従って行動したら、いてもいなくてもいい人間とみなされ、しまいには無視されてしまうであろう。一見すると、イスラエルではアガシのアドバイスに従うことが合理的で、日本では私のアドバイスに従うことが合理的であるようにみえる。一例を挙げよう。日本では友達と食事に行くと、一人が選んだメニューを、他の人も做って注文することが多い。ところが、イスラエルではそれぞれが自分の食べたいものを注文する。留学当初、私は友達と同じメニューを注文していたが、次第にわざと違うメニューを注文するようになった。同じ注文をすると怪訝な顔をされるが、違う注文をすると得心してくれるからである。他方、日本では同じ注文をする方が無難であろう。値段の差などにも気を遣う必要がないからである。とすると、合理性の規準というのは異なる社会によって相互に異なるものであり、したがって、共約不可能 (incommensurable) で、相対的であるという、相対主義 (relativism) の主張になるのであろうか⁹⁾。そうではない。

私がイスラエルにおいて、わざと別の注文をしたというのは一見合理的に見えるが、実はそうではない。ただの猿真似に過ぎないし、自分の欲求に忠実でもない。無理をしているだけである。他方、日本のように同じ注文をするということが、日本だけで通用する合理性でしかないというわけではない。時間的余裕がなく、ある時間までに食べなければならない場合には、イスラエルでも皆が同じ注文をする方が合理的であろう。先の2つの合理性の規準を比較して、このような反省、考察が可能であるということ自体が、共約可能性を示しているといえる。さらに、目的や条件を明確にしていく作業を通じて、より合理的な行動のあり方やその規準を探っていくことが可能である。また、目的や条件を明確化することによって、合理性を限定化、相対化するとしても、より合理的という方向 (direction) がありうるのであって、どんな規準でもかまわない (anything goes) ということを意味する相対主義とは違っている。これは私の造語であるが、相対化主義 (relativizationism) と相対主義 (relativism) は異なる主張である。相対主義は絶対主義の否定であるが、相対化主義は理念としての絶対的規準 (真理、善、正義など) を想定しているからである。例えば、アガシにアドバイスを受けたとき、日本の事情などを説明し、それについて論ずることによって、さらに良い、より合理的な指針を見いだすことができたかもしれないのである。

(3) 友人宅で

少数だが、テルアヴィヴ大学で勉強しているアラブ人学生がいる。残念ながら、アラブ人の方がユダヤ人より貧しいのが実情で、当然、学生もその例外ではなく、アラブ人の学生は一人ではアパートを借りる余裕はなく、友達何人かでアパートを借りて生活している (もちろん、ユダヤ人の中にも苦学生はいるけれども)。私はアラブ人の学生の家には2度しか行ったことがないが、ユダヤ人の家に行ったときはまったく異なる接待の仕方を受けたので、それを対比的に述べたいと思う。

ユダヤ人の家では、「自分の家のようにどうぞ」という言葉が最大の歓待の言葉のようであり、

これは文字通りに受け取ってよいらしい。書棚から本を勝手に取り出して読んでもいいし、冷蔵庫からジュースを出して飲んでもいい。自分の家ではそうするだろうからである。ある時など、あるユダヤ人の友達は「自分の家のようにどうぞ」と言った後で、「眠たいからちょっと寝る」と言ったきり、自分の部屋に入って、寝てしまったことがあった。自分の家にいるときのやうに何をしてもよいと言われても、そう簡単にできるものではない。どうしたらよいかかわからず、書棚から面白そうな本を取り出して、読みながら彼の起きるのを待つしかなかった。しばらくして起きてきた彼に、先の言葉を本当に文字通りに受け取るべきだったと言われてしまった。彼に言わせれば、つまらなければ帰ってもよかったのだそうだ。彼が「遊びに來い」と言ったにもかかわらずである。

ところが、アラブ人の学生は違っていた。彼らはいろいろと世話をしてくれる。家に着いたらすぐ、「のどが渴いていないか」と聞く。「うん、まあ」と曖昧に答えても、「何が飲みたいのか。コーヒーかジュースか」と聞いてくる（この点では、多くの日本人のやうに相手の嗜好にかかわらず、紅茶なら紅茶を出すというのとは違っている）。ここまで言われたのではと、「ジュース」というと、「じゃー、ちょっと買ってくる」という。「それなら、コーヒーでいい」といっても、「ちょっと待ってろ。すぐ買ってくるから」となる。「これがしたいか、あれがしたいか」とか、「これをしようか、あれをしようか」という具合に世話をしてくれる。私を放っておいて寝てしまったユダヤ人の学生とは大違いである。アラブ人の学生の応待の仕方はまるで日本人の家に遊びに行ったときのやうである。あるいは、それ以上のもてなしぶりかもしれない。しかしながら、この相違は、アラブ人とユダヤ人の相違というより、都市と農村の相違——アラブ人学生は農村出身者が多い——であるか、あるいは現代っ子と昔ながらのしきたりを受け継いでいる青年との相違であるかもしれない。

この違いについても、それぞれのやり方を簡単に相対化することができるだろうし、合理的な振る舞い方を見いだすこともできるだろう。しかし、ここでは具体的な検討は割愛することにした。

IV. 文化衝撃から文化衝突へ

ひとは自分の慣れ親しんだ社会の文化（生活様式、行動規範、人間観、価値観などを含む）とは、多かれ少なかれ異なった文化に接触すると、感情的衝撃や認知的不一致を体験する。その結果、ひどい場合には心身症の状態（孤独感、劣等感、鬱状態など）に陥ったりする。これを「カルチャー・ショック（文化衝撃）」¹⁰⁾という。そこから逃れるための極端な方法は、自文化を全面的に肯定し、異文化を全面的に否定する道——この場合には、異文化社会に留まる限りは自己閉鎖的にならざるをえない——と、その逆に、自文化を全面的に否定し、異文化を全面的に肯定する道——この場合には、自己否定あるいは自己の再教育となる——である。振り返ると、私はどちらかという、後者の道を選んでしまい、日本の伝統、文化を軽蔑し、否定する一方、異文化に迎合してしまう傾向があった。しかし、脱却する方法はこのどちらでもなく、またその両極端の間でもなく、第3の道がありそうである。それは、異文化との接触、体験を「カルチャー・ショック（文化衝撃）」としてというよりむしろ「カルチャー・クラッシュ（文化衝突）」としてみる見方である¹¹⁾。

この見方はポパーの思想によって啓発されたことによる。ポパーは論文「フレームワークという神話」¹²⁾の中で、合理的で実りある討論が成立するためには、その参加者が基本的な仮定に関するある共通のフレームワークを共有しなければならず、したがって、フレームワークを異

にする討論は不可能である。すなわち、フレームワーク内の討論は可能だが、フレームワーク間の討論は不可能であるという見解を「フレームワークという神話」と名付け、それを批判した。さらにフレームワーク間の討論は困難であるとしても、それが成功すれば、非常に実り豊かな討論になることを主張したが、その文脈の中で、次のように述べている。

もし討論の参加者が世界の異なった地域に育ち、異なった言語を話す場合、合理的な討論は明らかに極めて困難になるに違いない。しかし、こういった困難はしばしば乗り越え得ることを私は今まで経験してきた。…乗り越えらるべき大きな障害があるとすればそれは一般に、西洋思想の教化の結果である場合が常であった。私の経験では、悪しく西洋化された学校や大学における独断的で無批判な教育、そして特に西洋のくぐくぐしい用語や西洋のイデオロギーなどの訓練は、合理的な討論にとっては、いかなる文化的、言語的ギャップにもまして重大な障害であった。……この私の経験は次のことを私に示唆した。文化衝突は、もし衝突している文化の一方が自らを普遍的に優越したものとみなす時、その価値の幾分かを失う。そして、他方の文化によってもそれが認められてしまう場合、一層その価値を失う、ということである。こういった事態は文化衝突のもつ重要な価値を破壊するのである。

私たちはカルチャー・ショックを体験するが、誰も——文化的に劣位と思っている者だけが体験するのではなく、文化的に優位と思っている者も——が体験するのである。文化があらゆる点で普遍的に他を圧倒して優越している社会などもまた存在しない。このおそらく事実と思われることから出発すれば、極端な2つの道が成立しないことは明らかであろう。自文化と異文化をどちらも絶対化せずに対峙し、さらに議論や批判的検討を通じて、より良き文化を築き上げようと努力することによって、ポパーの主張するように、「フレームワークという障害を突破することは困難ではあっても、われわれにとって極めて価値の高いものであり、われわれの知的地平を拡張するばかりではなく、多大の喜びももたらしてくれるのである」¹³⁾。すなわち、カルチャー・ショックを否定的に捉えず、それをバネに、「文化衝突」として捉え返すことによって、文化創造に参加するという喜びを手にすることができるかもしれないのである¹⁴⁾。私たちは、個人のレベルにおいても、社会のレベルにおいても、相互に異なっているからこそ、創造や発展に寄与できる可能性がある。しかも、社会的にはその機は熟している。このことに少し触れることによって、結びとしたい。

V. 文化の選択から文化の創造へ

かつて西洋社会は、宗教という観点から学問、教育、芸術、音楽、文学、経済、政治、法、道徳などが統合された一枚岩のキリスト教社会であった。日本でも戦前には「お国のため」という大義名分の下に、あらゆる人間の社会的、精神的営みが統制され、制約されていた時代があった。ところが今日、世界のほとんどの社会は多様な文化、生活様式を抱え込んでおり、しかも国際的な情報網の発達により、他国の文化を知り、それを吸収することによって、それに拍車がかかっている。これまで、「文化」というと歴史的に築かれてきた1つの伝統と結びつき、それを個人が受け継ぎ、身につけるべき文化、すなわち、歴史的、社会的に個人が作られていくという文化の側面が強調されてきた。ところが、1つの社会が多様な文化を抱える社会に生まれ、育ってきた私たちには「文化の選択」という可能性が生じている。個々人が様々な文化、生活様式から自分に合う生活様式を選択できるようになったし、しかも現実に行っているのであ

る。すなわち、主体が社会から個人に移り、文化によって個人が作られる——もちろん、この側面も強力に残っているが——というより、個人が文化を主体的に選べることができるようになってきている。例えば、ヘブライ大学の教授で、正統派のユダヤ教徒でもあるが、日本の着物とお茶が気に入って、安息日になると当然仕事はしないが、和服を着て、お茶をたてて飲むのを常としている人がいる。これなど「文化の選択」のいい例であろう。

さらに今後は、既成の多様な文化や生活様式の中から選択するばかりではなく、文化を作るという創造的な活動に個々人が多少なりとも参加し、貢献できるようになるのではないだろうか。しかも、それは遠い将来のことではないかもしれない。個々人の人権の尊重、社会参加や政治参加の拡大、教育の向上、精神的豊さへの希求などによって、世界の多くの国でその可能性が高まりつつあるからである。世界の文化は多様化しているが、個々人が多様な文化を選択し、さらには創造に貢献できるようになりつつあるという点で、「世界は一つ」という方向に向かっていくともいえるのではなからうか。

註

- 1) この危惧が可能性ではなく、かなり事実であるということは、金沢大学の私の友人の留学体験記を読めば判明してしまう。彼の留学先はインドであったが、私と同じ様な体験を彼もしているのである。島岩著『インド：心と文化のオクターブ』明石書店、1994年。
- 2) 同じユダヤ人でありながら、イスラエルではアシュケナージ系（東欧出身のユダヤ人）とスファラド系（中近東、アフリカ出身）の不和が深刻であるが、そのことをイスラエル人は否定しようとする。ある進歩的ユダヤ人女性（イスラエル共産党員）にこの不和について質問したことがあった。彼女は両者の間で結婚する割合が最近増加していることを理由に、それが改善されつつあると答えた。しかし、その際に彼女は“mixed marriage”という言葉を用いたのであった！
- 3) 宗教としての「ユダヤ教」の側面についての概説は、拙稿、「ユダヤ教」、井門富二夫他著、『世界「宗教」総覧』、新人物往来社、1994年、338～343頁。
- 4) 宗教的かどうかを判断する目安は、キパー（小さな丸い帽子）を頭にかぶっているかどうかにあるが、私の数少ない宗教的ユダヤ人（私の友人の大半は非宗教的ユダヤ人だった）の中には、マクドナルドのハンバーガー（これはコーシャー（適正食品）ではない）を食べるとき、そのキパーを脱ぐ者がいた。このような人物も宗教的ユダヤ人の中に含まれているのである。他方、キパーをかぶらない者の中にも豚肉を決して食べたことのない者もいた。一部のキブツでは豚肉を生産、販売しており、イスラエルでも豚肉を購入することができる。私は奮発して豚肉を買い、それでカレーライスを作り、友人を食事に招待したことがある。その中にこの二人も含まれていた。本当はいけないことなのだろうが、牛肉で作ったカレーだと欺いてかれらに食べさせた。二人とも「おいしい、おいしい」といって食べた後で、私は豚肉であることを白状した。マクドナルドのハンバーガーを食べる宗教的(?)ユダヤ人の方は少し怒っただけであったが、もう一人のユダヤ人は、トイレに駆け込んで嘔吐したのであった。彼には悪いことをしたが、豚肉を食べないということが、生理的なレベルにまで達していたのであろう。ところが中には、日本人はエビが好きだからといって、港町ヤッフォのエビ料理に招待してくれたユダヤ人もいたのである。しかし、その彼も結婚式の際にはラビを呼んで、宗教的な伝統儀式に則って結婚したのである。
- 5) ハラハーによれば、形式上、「ユダヤ人」なのだが、実質的にも、非宗教的・世俗的なユダヤ人も、一部の例外を除いては、「ユダヤ人」といえるかもしれない。それは『聖書』が多かれ少なかれ、彼らに影響を与えているからである。『聖書』というどうしても「宗教書」、「信仰の書」としてのみ考えられてしまいがちであるが、歴史、思想、その他の文化の書でもあり、後者の点で影響があるからである。しかし、この点の考察については、別の機会に譲りたい。
- 6) ほとんど連日の送別会で飲まれたためであったが、イスラエルで生活して、つくづく日本が「酒文化」であることを実感する。中にはアルコール中毒の人もいるであろうが、一般にイスラエル人はお酒をあまり飲まない。私が留学していた当時、「パパ」が次第が増えてきて、学生の間ではパパでデートをするというのが

流行りつつあったが、それでも1人ビール1本(といっても日本の小瓶位のボトル)で、2、3時間ねばって話をするというものである。他方、私が寮の同室の友人(イギリス人)と飲みに行くと、1人で4、5本は飲んでしまう。そして酒が入るとようやく話が弾んでくるという具合である。

日本を離れる前に散髪しなかったことで、私は気が咎めたのだが、この感情も日本的なのかもしれない。外国人は、故国を離れる前に散髪しなかったことを気にかけるであろうか。

- 7) この主張は、合理性が目的達成のための手段としての合理性でしかないとか、目的自体の選択については合理性を問うことはできないとかというラジカルな主張を意味するものではない。例えば、私がピアニストになるという目的を設定したとして、それを実現することが逆立ちしても不可能であることが判明したら、ピアニストになるという目的を追求することをやめるであろう。その目的設定自体が非合理だからである。このような例だけからでも、目的自体について合理性を論ずることが可能なことがわかるであろう。
- 8) 日本では「真似をするとうまくいく」というのはかなり確かのようにであるが、これを実践したことによって、恐ろしい体験をしたことがある。イスラエルから日本に帰国する際、イギリス経由にもかかわらず、運賃が安いので南回りでの帰りにした。私の乗った飛行機は、何かの事情で、予定のコースにはなかったドバイに一時着陸することになった。機内のアナウンスが入り、一旦空港を出て市内のホテルで昼食をとり、それからまた機内に戻ってくるということであった。乗客がぞろぞろと降りだした。私もようやく後ろの方について歩き出した。運良くドバイ市内も見物できるかもしれないと思いながら、パスポートコントロールでパスポートを見せたところ、「あなたは外には出られない」と言われ、パスポートを取り上げられたうえ、銃をもった制服の男によって別室に連れていかれたのである。私には何か起こったのか皆目見当がつかなかった。私と同じような措置を受けた人々がすでに数人ほどいた。かれらも茫然としているようであったが、お互いに話しているうちになるほどと思える共通点が見つかった。それは全員がイスラエルに入国したことがあったということである。これからどうなるのだろうか私たちは不安になったが、幸運なことに——その時は幸運などとは全然思わなかったが、後日、最悪の場合には刑務所行きもあるとおどかさされたとき、背筋がぞっとしたことを覚えている——それ以上のことは何もされず、私たちはそこで出された昼食を食べながらしばらく待つだけであった。誰も水には口をつけなかった。その後、パスポートも返してくれたが、その時、「何の関係もないあなたたちにこのような待遇をして申し訳なかったが、今アラブの国々がイスラエルと戦争状態にあることはご存じでしょう」と言われてしまった。機内に戻ると、ずっと機内に残っていたという家族がいた。果たして、かれらはユダヤ人であった。かれらは初めから希望して残ったそうである。アナウンスの通りに皆の真似をしてついて行った私たち——私だけではなかったといっても何にもならないが——と違い、この家族は状況を的確に判断し、適切な行動をとったのであった。過度な一般化であるが、「自分の運命は自分で決める」ということに日本人はあまり慣れていないようである。
- 9) 科学理論についても共約不可能性が主張されたりするが、その主張およびそれに対する批判については、次の文献を参照されたい。I. Lakatos, A. Musgrave eds., *Criticism and the Growth of Knowledge*, Cambridge University Press, London, 1970. I. ラカトシュ, A. マスグレーヴ編『批判と知識の成長』, 森博監訳, 木鐸社, 1985年。
- 10) 「カルチャー・ショック」という用語はカラール・オバーク博士(K. Oberg)の造語のようであるが、「カルチャー・ショック」の克服法については、中国滞在の折、自らが苦勞の末、克服したカナダ人女性の興味深い論文がある。ジェーン・エドマンズ, 「カルチャー・ショックを乗り越えるには」, 『週間時事』, 時事通信社, 3月5・12日号, 1988年, 60-65頁。
- 11) 「文化衝突」というとサミュエル・ハンチントンの「文明の衝突 (the clash of civilizations)」を思い浮かべるかもしれない。ハンチントンの主張するように、衝突は対立、不和、血生臭い戦闘、破壊的戦争など暴力的悪に結びつくこともあるが、必ずそうなるというわけではない。実り豊かで、生を充実させるような発展を生み出す可能性もあるのであり、ここでいう「文化衝突」というのは後者の側面のことである。あるいは前者を回避する手段としてのそれである。いうなれば、「剣による戦い」ではなく「言葉による戦い」である。この点をポパーは強調している。註12の論文参照。Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations?*, *Foreign Affairs*, Summer, 1993, pp. 22-49. サミュエル・ハンチントン「文明の衝突?」, 『中央公論』, 中央公論社, 1993年8月号, 349-74頁。
- 12) K.R. Popper, *The Myth of the Framework*, Eugene Freeman ed., *The Abdication of Philosophy: Philosophy and the Public Good*, Open Court, La Salle, Illinois, 1976, pp. 23-48. この論文の改訂版が、同名のタイトルで最近出版されたポパーの著書に再収録された。Karl R. Popper, *The Myth of the Frame-*

work : In defence of science and rationality, Routledge, London, 1994, pp. 33-64. 小林傅司訳, 「^{プレナムワーク}準拠枠という神話」, 『思想』, 662号, 1979年, 109-133頁。以下の引用は, 最新版による。また, ポパーは「文化衝突について」というそのものずばりのタイトルの論文も書いているが, その中で, 彼は, 推測的な歴史的仮説であると断わったうえで, 西洋文明の基礎となった古代ギリシャ文明や, 近いところでは, 科学, 哲学, 文学, 芸術, 音楽等の分野で創造的所産を遺した世紀末ウィーンの文化などが, 多様な異なった「文化の衝突」——特に東と西の衝突——から生じたことを論じている。Karl Popper, *On culture clash, In Search Of A Better World*, Routledge, London, 1992, pp. 117-26.

- 13) *Ibid.*, p. 61. 傍点は引用者。
- 14) しかし, ポパーの提言を実践することは容易ではない。知的側面においてばかりではなく, 寛容, 忍耐, 粘り強さ, 不屈などを発揮できるための精神の強靱さが必要であることを痛感せずにはいられない。